

## 耳であるくレディング生活 — 音声の多様性、L2、大学 —

小松 雅彦

2016年4月から在外研究の機会をいただき、イギリスのロンドン近郊のレディングという大きな町に滞在している。最初に実感したのは、英語の発音の多様性である。イギリスは地域方言・社会方言とも多様であるということは教科書で知っていたが、実体験してみると想像以上である。レディングでは、まるで会う人ごとに違った発音をするような印象である。なぜこんなに違う発音どうしでお互に通じているのか不思議である。皆色々な発音を聞き取るのに慣れているのであろうか、私の発音する英語はすんなり理解してもらえ、相手の言うことはさっぱり分からないことが多い。しかも、聞き返してもゆっくり言ってくれないし、言い換えてもくれない。ここまで多様な発音が通用しているとなると、日本の英語教育において発音の教育をどうするか考えないといけない。また、レディングを離れてみると、地域によって独特の声質を使っているのではないかと思われることがあった。

レディングには、多様な出自の人たちが住んでいる。ちょうどレディング大学の学部生の研究 *Superdiversity and the linguistic landscape of Reading* (B. Jupe, 2016) が、学内の賞を取った。それによるとレディング中心部の看板や掲示で23言語の使用が確認されたらしい。私の体験だ



ネス湖 (スコットランド) にてネッシーと

と、バスに乗っていると何語だか分からないが同時に色々な言語が聞こえてくることがある。レディングの街を見ていると色々な民族の人がいて、なんとなく、幼児用の絵本の世界を彷彿させる。森に色々な動物がいて仲良く暮らしているが、家族や連れ立っているのは同じ種類の動物が多い。

その他に、発音で気が付いたのは、Thank youの発音である。私の耳には「サンキュ」でなく「サンキ」に聞こえる発音 ([ˈθæŋk jɪ]) をする人が特に若い人に多い。これは、GOOSE fronting と呼ばれる現象で、ここ半世紀くらいで[u]が中舌化しさらに円唇性を失ってきている。

4歳の娘のSawaがSarah先生に音楽を習っていて、そこで気付いたのだが、イギリス人の幼児がSarahと言うと、私の耳には「サワ」と聞こえてしまう。英語の/r/は円唇性があり、幼児はまだ舌の動きが不十分なので、そう聞こえてしまうの

だろう。英語の /r/ の円唇性を改めて実感した。そう言えば、娘は water を「ポーチャ」「ポータ」と言うが、これは /w/ の円唇性が強いからだろう。

我が家で一番濃厚にイギリス人と接しているのは、その4歳の娘だろう。迂闊なことに当地に来るまで知らなかったのだが、イギリスでは5歳になる前の9月に小学校に入学する。小学校と言っても0年生だが。英語が全く分からないまま5月から幼稚園に行き始め、幼稚園の夏休みに保育園に行き、9月から小学生になった。慌ただしいことこの上ない。さて、子供はすぐに外国語を覚えると言うが、大人の場合と同じでかなり個人差や状況による差があるのではないだろうか。実は、イギリスに来た当初、急速に日本語が発達し、複文を使って因果関係などを説明するようになった。一方で、英語は、時々、プロソディを真似て無意味な文を発することがあるくらいであった。第二言語獲得でこのような喃語後期のような段階が現れたのには驚いた。詳しくは分析していないが、2子音連続までは出現していたが3子音連続は出現していなかったように思う。しかし、なかなか英語は話さない。5月末頃には、本人が「英語を話したら日本語を忘れるから話したくない」と言ったのである。幼児侮るなかれ。自分ははず

れ日本に帰るということを知っていて、それなりに考えている訳である。半年ほどして、小学校入学後、かなり英語が理解できるようになり、自信もつけ、11月初めから、突然、英語を話すようになった。最初は、単語というよりも、日常よく使われそうなごく短い英文である。それから急速に産出する語彙も増えていき、12月には英語と日本語のちゃんぽんで話すようになった。日本語の語彙はやや忘れており、例えば、英語で数を数えられるようになったが、日本語では数えられなくなってしまった。一言で幼児と言っても月齢によって言語の発達段階は異なる。4歳だと、かなり複雑なことを話し始めている訳で、子供同士のコミュニケーションにおいても言語に依存する部分が大きいと思われる。そうすると、突然その中に入っていくのはハードルが高いのではないかな。もう少し幼いと、周りも単語だけとか簡単な文しか話していないので、入っていきやすかったのかもしれないと思う。

さて、レディング大学は、学生数は神大と同じ規模だが、神大と比べて非常に広々としている。神大の横浜キャンパスが0.1km<sup>2</sup>なのに対し、レディング大学のメインキャンパスは1.3km<sup>2</sup>で湖や森もある。キャンパス内に保育園もあり、娘も



レディング大学。湖には野鳥がいる



レディング大学キャンパス中心部。左が人文社会科学棟、右が図書館

短期間だが通った。

イギリスの大学は、学部が3年、修士が1年と短い。私の居る Department of English Language and Applied Linguistics は、学部生は1学年だいたい50名前後だが、30数名のこともあれば60数名ということもあるそうである。修士は通学生が20数名で、通信生が同数、博士は20数名だそうである。教員はフルタイム10名にパートタイム3名で、ほぼすべての授業をこのスタッフで担当している。学生数1学年200名×4学年、専任教員14名で、約60%の授業を非常勤に依存している神大英文学科とは大きな違いである。人により異なるが、各教員の担当授業数は年間で4個程度(神大は半期で学部5個以上)、論文指導は学部・大学院合わせて10数名だそうである。最近の大学の英語学強化の方針で、ST比は35から20へ、担当授業数は7から4へ下がったのだそうである。事務職員も学科にフルタイムが3名いる。学生の方とは言う、学部生は週に6コマ授業を受ける。これも随分と日本の大学とは異なる。ここまで違っていると、神大とはそもそのシステムが違うと言わざるを得ない。ただ、こちらでも、校務の負担は多く、また年々増えているそうである。

レディング大学の Department of English Language and Applied Linguistics は、TESOLで有

名で、世界中から学生が集まってきている。J. Setter 教授の修士課程の音韻論の授業を聴講したのだが、教職のために基本的な事柄を厳選して教えるという感じである。学部で関連した分野を学んでいない者も受け入れているという事情もあるのかもしれない。その代わり、授業時間の半分ほどは音声記号を使ったディクテーションのトレーニングに費やされる。神大大学院でも英語の教職志望者が多いので、シラバスの参考になる。

ところで、肝心の私の研究の方とは言う、幼児向けアニメを見て音声学の授業で使えないかと考えたりしている程度である。

紙幅の都合で、おもに音声学に関わる事柄だけ記させていただいたが、もちろん外国に暮らすと色々ある。私の前回の外国暮らしはちょうど20年前、カナダ。前回と比べて今回は何かしら大変で、何が違うのかと考えるに、単身と家族連れの違いか、加齢による衰えか、それともやはりイギリスが大変なのか。在外研究の研究課題は音声学だが、むしろイギリス文化入門の実習をしているようである。しかし何となく今ここで生活できているのは、多くの方の支えあってのことである。名前を挙げようとする膨大な紙幅が必要になってしまうので割愛させていただくが、皆様方に厚く御礼申し上げます。